

その堅果を食べるのに多くの時間が費やされていたため、多種類の食物に関するサルの採食テクニックを観察することはできなかった。

資料は現在整理中であるので、ここでは結果の概略のみを述べる。観察は10月7日から13日までの1週間におこなった。この間に採食された食物は、果実および（または）種子が11種、葉が1種の合計12種であったが、さまざまな性や年齢の個体が採食する場面を目撃したのは、ブナを含め4種のみであった。これら4種については、個体の成長の比較的早い段階で、採食テクニックが完成されると思われた。個体の成長にともなうテクニックの発達と、完成されたテクニックの地域間比較が、今回集めた資料の分析および今後の資料収集におけるおもしろいテーマである。

なお今回は利用しなかったが、採食テクニックの検討、とくに口に運ばれたあとの食物処理については、ビデオフィルムによる分析が有効であろう。

自由24：

伊豆大島におけるタイワンサルの研究

川村俊蔵（京都大・名誉教授）

これまでの経験により、12月1～20日、1月23～2月20日の2期、効率のよい研究を行った。第1期内にHa群の餌付けに成功したが、餌の投与量、時間を厳しく制限し、投与場所の選定も含め、サルの遊動等、生活に極力影響しないように努め、たまたま来合わせる僅かな数の住民等にも、注意書を含む説明書類を用意し、悪影響の出ることを防いだ。

餌量が頭割り平均生イモ50gと少いこと、若令層が多いこと等から、個体識別には手間取り、約35匹中で自信あるもの20頭余にとどまり、あとは上智大院生和田千鶴子にバトン渡しし、3月現在ではほぼ完了を見たとの報告をえている。一方写真入りの個体識別簿を作製しており、今後の研究の基礎固めが進行し、完成に近づいている。

Ha群においては、オスの総入れ替えという、劇的な事件があった。昨年群れ外オス撃退の中心であった、2位オスと目されるTomoは、12月時点ですでに群れの外でしか見られなくなっており、オトナオスの数が去年の8～10頭から4頭に減じ、Goroら少なくとも3頭の群れ外オスがしばしば群

れの中心に侵入していた。Taméらの群れオスは明らかに圧迫されていたが、1回だけであるがTaméがGoroに突進し、短時の接触があった。1月にはTaméら4頭はすでに群れ外に落され、Goroらがとって代ったが、新入りのオトナオスは7頭を数える。一方群れ育ちの5才オス2頭は残った。これらのオス間に儀式的調整行動が頻発している。

メスらはオスの変化に独自の対応をしているが、内容は複雑で要約が難しい。群れの分裂はないと考えている。1才未満児を含め、子との接触が稀である理由は何か。ニホンザルの資料と比肩できる精度を今や持とうとしている段階で、種間比較上の問題点が多発しており、今後の展開が大いに期待される。

自由26：

サルが主食とする樹種の結実の年次変動

高槻成紀（東北大・理）

鳥獣にとって果実は重要な食糧であるが、一方果実をつける植物にとってはこれらの動物は種子散布者として重要である。このような動物散布に関して、近年ことに鳥に関する研究が盛んになりつつあるが、サルなどほ乳類に関しては必ずしも多くない。

金華山島は近隣の場所に比べてガマズミが異常なほど多い。このことはサルによる散布が関係している可能性があるので、これを調査した。

サルによるガマズミの利用はガマズミ果実に被いかけの実験により、11月をピークとして、果実数の約50%がサルまたは鳥により持ち去られることがわかった。

一方、サルの糞は林内で最も多く、草原、林縁の順に少なかった。しかし、サル糞に含まれるガマズミ種子数は逆に林内のものが少なかった。その結果としてサル糞に由来するガマズミの種子数は、草原、林縁、林内の順であると考えられた。

ガマズミの実生の密度はガマズミの成個体の多い林縁よりもむしろ林の内部で多い傾向が認められたので、密度調査を行ったところ、ブナ林のうちハナヒリノキの密生する部分で5.6/㎡、ハナヒリノキのない部分では8.8/㎡もの高密度であり、モミ林では0.1-0.4/㎡の範囲にあった。これらはススキ群落の0.04/㎡よりはるかに多く、